

清末小説に見る女性像——王韜『淞隱漫録』に対する一考察

(名古屋大学大学院) 黒川 由希

[要旨]

本稿は、上海の新聞『申報』の副刊・『点石齋画報』に1884年より付録として連載された王韜の文言筆記小説『淞隱漫録』の単行本刊行の経過を明らかにするとともに、小説中の女性像からその背後にある文化概念を分析した。『淞隱漫録』には人格や気概など、精神的な面で女性を男性より優れたものと見做す明清文学伝統が色濃く反映されている。それと同時に、旧来の審美眼では必ずしも称揚されない、それだけに現実的でもあるヒロインを造形しているところに清末小説としての新しさも見出せるのである。

I. はじめに

本稿は、19世紀以降の中国読書人層における女性観の変容を解明する目的のもとに、王韜⁽¹⁾の文言小説『淞隱漫録』を取り上げ、その刊行の経緯を明らかにしつつ、同書における女性像を分析しようとするものである。

政治、経済から教育・外交・科学技術・地理・歴史・文学などに至るまで広範囲に筆を執った王韜に対してはこれまでPaul A.Cohen・忻平・張海林などが評伝を著し⁽²⁾、王韜とキリスト教、太平天国などとの関係を明らかにするとともに、中国近代化をめぐる政治経済論を中心にその思想を分析している。しかしながら未刊行書籍や未収集の文章を相当に残す王韜の研究は未だ十全なものとは言い難く、特に文学面への考察は、政治思想方面の研究に比べ疎略にされがちであった。だが青年期に科挙の道を断念して以降、読書人の中で「その経歴はかなり変っている」⁽³⁾王韜が、生涯の様々な感慨を託したと称するその小説作品には、却って偽らざる価値観や心情が表れており、検討の価値がある。近年、中国大陸は勿論、台湾や香港でも王韜の文学作品への研究が進みつつあるの

はそのためだ⁽⁴⁾。小説中の女性登場人物の分析は、先行研究においても重視される問題であるが、それらは以下のように概括できる。つまり、西洋の男女平等思想に触れ、女性尊重の認識を得たために、王韜の創出した女性形象の中には「思想の解放された近代文化人の人性に対する新認識を体現」⁽⁵⁾しているものも存在する。但し「後れた部分も多く、伝統的女性観が小説中になお多くの烙印を残して」⁽⁶⁾おり、作品中の節婦烈女の顕彰や賢妻美妾の描写に、王韜が決して完全に伝統的觀念の束縛を脱することはなかったことが反映されている、と評価するのである。

しかし伝統とは一面的なものではありえず、王韜が「束縛」されていた伝統觀念がいかなる性質のものであるかを考察しない限り、王韜の女性像の本質を論じたことにはならない。合山究によれば、封建的男尊女卑意識がピークに達し、中国史上最も厳しい女性抑圧の行われた時代であったかのようなイメージがある明清時代であるが、実際には明代後期以降、宋元時代の「理」に重きを置く主知主義の文化から、「情」に重きを置く主情主義の文化への質的転換がおり、それに伴って「女性」がこの時代の主要な文学的関心の対象と

なっていた⁽⁷⁾。具体的に言えば、魯迅をはじめ近現代の作家や学者たちから、女性にのみ貞操を要求するものとして厳しく批判されてきた明清時代の大量の「節婦烈女」伝には、実は男性批判が込められており、結果的に男性の価値や存在感を相対的に低め、女性のそれらを高めることに寄与したと考えられるのだ⁽⁸⁾。更に清代に流行した「佳人薄命」の美意識や仙女崇拜にも、明末以降、女子教育の普及などによって才貌兼備の佳人が多く現れたにもかかわらず、不平等社会の中で彼女たちが不幸な生涯を終えたことへの文人たちの同情が示されていると解釈できる⁽⁹⁾。本稿は、『淞隱漫録』の女性像のルーツをこうした明清文学との関連性において明らかにした上で、更に新たな女性形象の開拓について論じるものである。

II. 『淞隱漫録』——成立・刊行時期・刊行者

『淞隱漫録』の完成と初刊の時期、当初の編成や刊行者については不明の部分も多い。魯迅『中国小説史略』には王韜の文言小説三書が取り上げられ、それぞれ「『遯窟譚言』（同治元年に成立）、『淞隱漫録』（光緒初年の成立）、『淞濱瑣話』（光緒13年の序）の各12巻」⁽¹⁰⁾と記されている⁽¹¹⁾。また忻平は「1875年、広東刊版、16巻」⁽¹²⁾を初刊として挙げる。しかしこれらが成立、又は初刊の時期をそれぞれ光緒初年、或いは1875年というのは、王韜自身が自序で執筆の経過を次のように述べていることから明らかに誤りであろう。

私は以前『遯窟譚言』という本を著した。これは行き詰って香港に隠遁していた時の作である。先ごろ旅疲れて上海に帰り、小さな家を建て、本を所蔵し、家族で寄り集まって風雨を凌いでいる。窮して将に死なんとしている時に、どうして戯言を綴る気になれようか。（しかし）尊聞閣主人はしばしば刊行のための読み物を私に所望するのである。そこで酒や茶に飽きれば明かりを灯し、紙と筆を取り出し、些か三十年

来に見聞した驚くべきことを書き記した。ある時は思い出が、ある時は古い恨みが蘇り、大いに筆が動き、時には涙が混じることもあった。脱稿するごとに娘婿に転写させた。尊聞閣主人はこれを見ると大いに感激した。画家に挿絵を描かせて発表し、陸續12巻と成ろうとしている。名付けて『淞隱漫録』という⁽¹³⁾。

「尊聞閣主人」というのは、1872年から上海で中国語新聞『申報』を発行していたイギリス人アーネスト・メイジャー（Ernest Major）で、彼は1884年5月8日、『申報』副刊の旬刊誌『点石齋画報』を創刊、ちょうど同年に香港を去り上海に居を定めた王韜に寄稿を求めたのである。1884年とはつまり光緒10年であるから、光緒初年に完成していたとは考えられないのだ。ところでこの自序は、『淞隱漫録』巻一「華璘姑」とともに1884年6月発売の『点石齋画報』第6号（甲6）の巻末に付録として付されたもので、既にほぼ12巻が成っているような文面である。游秀雲・陳大康などが、単行本『淞隱漫録』の初刊を1884年の点石齋版と述べるのはこの自序に基づいている⁽¹⁴⁾。しかし現行の『淞隱漫録』全12巻のうち、「清溪娘小伝」「合記珠琴事」（ともに巻十）はそれぞれ「丙戌仲冬」「丙戌冬杪」（1886年末）に友人から聞いた話と記すのであるから、現行版が少なくともそれ以降に成ったことは間違いない。

張海林や中島長文が、『点石齋画報』への連載が終了した1887年、点石齋版『淞隱漫録』の単行本が刊行された⁽¹⁵⁾と述べるのは妥当であるが、『申報』に掲載された関連記事や広告からは、更に些か込み入った刊行事情を窺うことができる。1887年8月14日付『申報』から数日、次のような広告が掲載された。

『石印後聊齋誌異説初集』長洲の天南遯叟は文壇の勇将、墨海の閑人です。この本は彼の得意作で、筆致は『聊齋志異』に倣い、怪を説くことを旨としています。数十年の閱歴、数万里

の遊歴で見聞した侠女・天才・霊狐に妖怪、更には青楼の名妓から貧寒書生に至るまで、凡そ驚き、敬い、喜ぶべきことを巧みに描写し、長短もまた程よいものとなっています。ここに特に費用を惜しまず、美しい楷書にし、また呉友如先生に一話ごとに絵を描いて頂いて石印するものです。7月15日に完成の予定。本書が発刊されれば『聊齋志異』に匹敵すること請け合いです。毎部マホガニーの表紙を用い、洋2元で上海棋盤宝文閣並びに各書店で発売します。味間廬啓す⁽¹⁶⁾。

ところが1887年8月22日付『申報』からは、次のような王韜の抗議文が掲載される。

ここ数日、味間廬による天南邇叟作『石印後聊齋誌異図説初集』^(ママ) 発売の広告が現れ、驚いた。小生にそのような本はなく、推察するに『淞隱漫録』のことであろう。これは説部の類で、『画報』の巻末に挿絵付きで毎号一話ずつ掲載したものである。光緒甲申年の第6号から始まり、発表のたびに頗る内外の名士に愛好され、現在までに120話になった。この本は全16巻で、なお未収のものも仕上げて集成装丁し、完璧とするはずであった。図らずも先を越す者があるとは、実に奇怪なことである。この本は、点石齋主人が高値で買ったもので、以降どのような形で刊印するも点石齋主人の一存にかかり、天南邇叟もまた自由に出版することは出来ない。何故ならば既に稿料を受け取っているからである。然るに今、点石齋主人にも小生にも無断でこの挙に出るとは如何なることであろうか。小生は光緒壬午年に上海へ帰ってから、ただ閉門して著述するばかり、外事には関わりないのであるが、この書籍については弁解せざるを得ない。何となれば点石齋主人との間に任意に刊行しない約束があり、しばしば点石齋主人に詰問され、どれほど言っても誤解が解けないからである。昔から硬骨漢をもって自認していたはず

であるのに、味間廬主人よ、小生の立場をどうしてくれるのか。連絡を待つ。光緒丁亥秋7月3日、天南邇叟謹白⁽¹⁷⁾。

これによれば、王韜は『淞隱漫録』単行本の刊行をメイジャーに一任する約束をしていた。しかし版權という概念の未確立であった当時、他の書店から無断で同書印行の広告が出たためメイジャーから疑われ、このような声明文を発表せざるを得なかった。以下に引用する点石齋の『淞隱漫録』刊行の最初の広告は、1887年8月24日付『申報』に初めて現れ、発売予定日は味間廬より5日後れるのであるから、両者が広告通りに刊行されたとすれば点石齋版が最も早い単行本ではなかったわけである⁽¹⁸⁾。

本書店の印行する『淞隱漫録』は、天南邇叟^(ママ)の作で、味間廬の言うところの『後聊齋誌異図説初集』です。これは本来16巻なのですが、まず12巻を先に出版し、残りの4巻は『続録』に収録します。天南邇叟の筐底にはまだまだ新奇怪異の話が沢山あり、『淞隱続録』12巻も出ていますので、追って出版します。『淞隱漫録』の文章の美しさ、詩句の華麗さは多言を要しません。蒲松齡の『聊齋志異』と比肩して遜色なく、近代の説部の中でも右に出るものはないでしょう。各編の冒頭に一枚挿絵を付けます。どれも名人の手になるもので、呉友如君が手掛けたものも少なくありません。楷書の文字も端麗です。手透きの時に、明るく清潔な部屋で、香でも焚きながら読んだなら、世の愁いや悩みも忘れられ、全く世間の悪書と同日の談ではありません。誇称と思わず是非ご予約を。4冊毎部定価洋1元2角、7月20日出版予定、購入希望者は南北申昌まで御来臨下さい。まとめ買いは値引きします。敬白⁽¹⁹⁾

以上2編の文章からは『淞隱漫録』編成の一端も明らかとなる。つまり王韜の手元には『点石齋画報』に連載した120編以外に更に4巻分の作品

があったが、結局それらは『淞隱漫録』には収録されず、次作に持越されることになったということだ。まもなく点石齋からは縮印本も刊行されるが、その広告からも他書店から刊行された事にメイジャーが如何に業腹だったかが窺える。

『淞隱漫録』は、本書局が大枚をはたいて天南遯叟を招き、見聞するところを書いて頂いたものです。一話ずつ『画報』の末尾に附したところ、現在までに12巻と成ったので集録して書籍とします。発売に際して修正を加え小型に縮印したのでますます彩り鮮やかです。世のよく偽書を作す者の及ぶところではありません。12巻4冊、綾の箱入り。価格洋1元、まとめ買いは面談で。15日に南北申昌及び各書店で発売します。どうぞご購入下さい²⁰⁾。

これに対し王韜自身は、『淞濱瑣話』²¹⁾の自序に「『淞隱漫録』はたびたび重刻され、或ものは『後聊齋図説』と題されて、購入者は極めて多かった」²²⁾と述べてその好評を誇る如くであり、更に別の文章では「民間の友人が間もなく翻刻し、『後聊齋^(ママ)志異図説』と名前を変えた。図画は原刻より優れていた」²³⁾と、むしろ翻刻版の方が良いとまで評するのであるから、流行を喜ぶ下心もあったかもしれない。

この他、中国大陸の王思宇校点本では、「原本未収の4編」²⁴⁾として「徐麟士」(巻一)、「葉孃」(巻三)、「田荔裳」(巻十)、「画船紀艷」(巻十二)を追加しているが、これらのうち少なくとも「徐麟士」「葉孃」は『点石齋画報』には掲載されていないことが確認できるので、游秀雲が推測する通り、『淞濱瑣話』から混入したものであろう²⁵⁾。

Ⅲ.『淞隱漫録』の女性像

1. 仙界の妻

『淞隱漫録』12巻120篇に登場するヒロインのタイプとして最も多いのは、「仙女」を思わせる人間離れした美貌・才能・人格を兼ね備えた女性で

ある。結婚すれば夫に尽くし、時には納妾を勧めさえする彼女たちは、典型的な「佳人」「賢妻」であり、些か男性に都合のよい存在とも見なせるが、しかしまた男性を凌ぐ才能と気品を持つ存在として描かれていることも事実だ。こうした王韜の仙女像のモデルとなったのは、王韜の最初の妻楊氏であると考えられる。1847年に結婚した二人は、新婚当初から甚だ仲睦まじく、間もなく父の死により単身上海へ出ることを余儀なくされた王韜は、妻恋しさに輾轉反側するほどだった。やがて老母や弟とともに妻子も上海に呼び寄せたものの、1850年、病を得た彼女は発病から10日も経たぬうちに急死してしまう。その死から20年以上後、楊氏の小伝を著した王韜は、その生い立ちや性質を次のように述べている。

楊碩人、名は保艾、字は臺芳、後に私が字を夢蘅に改めた。菑汀先生・諱は雋の三女、醒逋茂才・名は引伝の実妹である。早くに両親を亡くし、叔父に育てられた。幼少から利発で、叔母に代わって家事を取り、巧みに炊事や掃除をなした。本は読めなかったが、児童の塾の教科書は朗々と暗誦した。しとやかで口数は少なく、道理をわきまえ、叔母や姉たちの間にあって折り目正しく、努めて皆を楽しませた²⁶⁾。

この夭逝した妻への思いは『淞隱漫録』執筆時の晩年でも鮮明だった。1884年、同じく妻に先立たれた友人の管秋初のために、彼の亡妻・潘孺人の略伝を書いた折、自らの亡妻への思いも吐露している。

余もまた23歳で妻を亡くした。楊碩人、字夢蘅は当時僅かに24歳だった。秋初と同じ悲しみである。今潘孺人の伝記を記せば、前事が甦って老人の胸に迫り、思わず涙にくれた。これ以上涙に噎ばないように急いで書き記して秋初に送る²⁷⁾。

この「潘孺人伝略」をモチーフにした『淞隱漫録』の「悼紅仙史」(巻七)は、王韜の亡き妻へ

の幻想が典型的に表現されている一編である。伝記での潘孺人の出自と幼少時代が「潘孺人、名は珠、またの名を媚蘭、字は素五。甫里人で煥卿の五女、恕齋解元の従妹である。読書人家庭の生まれで、一門の者は皆詩文をよくした。孺人はわけでも物静かで品があり、聡明利発だった。6, 7歳になると女友達とも遊ばなくなり、筆を執って文字に親しみ、拓本を見れば臨模したが、上手く模倣できるまでやめなかった。書物にある字を兄に一二度尋ねれば、すぐに朗々と誦んじた」⁸⁸というのに対し、「悼紅仙史」のヒロインは「潘素五、字は媚蘭、幼名は珠児、名門の生まれである。父煥卿は正直な読書人で、郷里で徳行の人として知られていた。(中略)娘は幼少から利発で、いつも姉たちについて詩を吟じ字を学び、化粧の合間にも画を描き、しとやかだった。8, 9歳でもう大人のように、女友達が遊びに誘っても婉曲に断った」⁸⁹というもので、両者はほぼ同じである。続く太平天国の乱による受難に関する部分も共通し、両者とも肉親が相次いで亡くなった後、娘は只一人残った父に献身的に仕える。そして管秋初との結婚後、夫婦が共に作詩して楽しむ結婚生活、病床で妻が夫に再婚を勧めて亡くなるまで、両者にはほぼ差はないのであるが、妻の死後、管秋初が気晴らしのため霊山である天台山へ旅をする展開から「悼紅仙史」は幻想の世界に入る。天台山に到着した「悼紅仙史」の管秋初は、占術で有名な吸霞練師と意気投合し、彼から「貴方の奥様はもと天上の仙女でした。罪があつて俗世に謫され、貴方との短い縁を結んだのです。貴方には既に他の女性との夫婦の縁があるのですから、くよくよしないことです。明日をお待ち下さい」⁹⁰と意味深長な言葉をかけられる。翌日遊山に出かけた管は果して妻と再会するが、既に仙界に戻った妻は俗塵の執着や煩悶とは無縁であり、夫に対しても特別な感情を表すことはない。

このように「悼紅仙史」は、愛妻が貶謫の仙女

に重ね合わされているのであるが、同様の設定は「月仙小伝」(巻十二)にも見られる。容姿端麗で詩にも針仕事にも秀でる月仙と結婚した莊生が、単身科挙受験へ赴いたその帰途、夢の中で山中の精舎に迷い込む。奥の書齋に妻の姿を見かけ、思わず欣喜して名前を呼ぶが相手にされない。やがて声を聞きつけて駆けつけた側女から「誰がお前の妻だと言うのです、この方は仙界の第七王女で、最近ここに越してきたのです。お前のような俗物が妄りに見ることはなりません。早く出ていかねば、怪獣に足を噛みつかせますよ」と追い払われ、訝しんで近くにいた道士に尋ねると、「その人はお前の妻ではない。お前と妻との俗縁は既に尽きたのだ。縁が尽きるのは香が燃え尽きるようなもので、再び火がつくことはない。思い切ることだ」⁹¹と告げられる。目覚めてから不吉に感じた莊生が急ぎ帰郷すると妻は病臥しており、莊生を見ると千愁万緒、物言いたげであつたが一言も発せられないまま息絶えた。

その他にも「蓮貞仙子」(巻一)、「何慧仙」(巻二)、「凌波女史」(巻三)、「三夢橋」(巻三)、「陸月航」(巻六)、「駱蓉初」(巻九)など、仙女或いはそれを思わせる女性と才子が縁を結ぶ話は数多いが、ここには王韜の亡妻の倣が託されている。伝記によれば、現実の彼女は決して作詩が出来るほどの文才を持っていたわけではなかったが、王韜から見ると何事をするにも聡明で、誰に対しても思い遣り深かった。故にわずか24歳で亡くなった彼女が、世俗に穢れず何事にも寛容な仙界の女性にまで崇高化されて小説中の人物に投影されたのである。

2. 扶乩と女性

仙女に関連して、明清時代、王韜の故郷甫里を含む蘇州・金壇・鎮江・上海など揚子江下流域で文人の風雅な遊びの一種として流行していたものに「扶乩」という降霊術がある⁹²。降壇する乩仙

には女性も多く、彼らは未来を予知する他、「自分の前身を語ったり、仙界の様子を述べたり」³⁹⁾したという。王韜とほぼ同郷である明末の文人葉紹袁（蘇州府呉江県の人）は、愛娘と愛妻を相次いで失うと彼女たちがもともと仙女であったと固く信じるようになり、盛んに扶乩を行って霊界情報を求めたといい⁴⁰⁾、またこれも同郷である明末清初の文人尤侗（蘇州府長洲県の人）は薄命の佳人を前身とする仙女との間のロマンチックな恋愛遊戯を楽しんだ⁴¹⁾。扶乩と女性とは切っても切れない関係にあったわけだが、王韜が生い立ったのはこうした扶乩や仙女崇拜の風俗が未だ色濃く残る時代・地域だった。『淞隱漫錄』にも扶乩を取り入れた作品が見られるが、それらにはどのような特徴があり、また往々現実主義者と評される王韜が、何故そうしたものを取り入れたのかを考えた。

「李韻蘭」（巻六）に登場する才色兼備のヒロイン李韻蘭は、陸生と結婚し仲睦まじかった。韻蘭の気質は甚だ善良で、妓女の友人を苦海から救うため、彼女を夫の妾とするほどだったが、若くして病死する。その韻蘭を70歳を過ぎても忘れられない陸生が、ある晩友人たちと扶乩をすると、筆が独りで動き出し、書を下して「私は李韻蘭で、今は蕊珠宮の校書仙子です。以前俗界で陸さんの妻でした。今陸さんが此処にいるのを知り、会いに来ました」と名乗り、更に「陸さん、世間一切のことは全て幻想です。富貴が泡沫のようなものであるのみならず、夫婦や親子も仮初のもので、永遠ではないのです」⁴²⁾と告げて帰っていく。当時の中国では、扶乩に亡妻が降壇したというような事がしばしば話題になっていたようで⁴³⁾、王韜の場合も愛妻の早逝が扶乩をより身近に感じさせたのだろう⁴⁴⁾。

「乩仙逸事」（巻四）も扶乩で降下した二人の女性の話であるが、別の趣きがある。一人目の少女は、才人を以て弘光帝⁴⁵⁾の後宮に選ばれた柳翠雲、

明末の兵乱で賊の捕虜となり、隙をついて溧陽郊外で自殺した。200年余り後、つまり清末の当時、溧陽の文士たちが扶乩すると翠雲の霊が下り、「行いの優れた女性が非命に倒れても、歴史書には載りません」と無念を訴え、「もし詩や歌曲に詠われ、或いは表彰して地方志に載せてもらえたら、新たに生まれ変わるようなもので感激に堪えません」⁴⁶⁾と語る。二人目の程季玉は太平天国の乱で殉難した少女、これも文人たちの扶乩に降壇し、同様に生前の不幸と、現在既に仙班にあることを告げる。そして一話の末尾には「柳・程の二人はか弱い女子の身でありながら凶暴な者に抵抗して怯まず、死に臨んで怖れなかった。彼女たちを前にしては大の男でも面目を失うだろう」⁴⁷⁾との作者の評語が加えられる。即ちこの作品からは、明清文人に特徴的な、薄命の少女に対する憐憫の情を見る事ができるのである。

以上のように、王韜の扶乩作品は、亡妻への思慕や薄幸の女性への同情に根ざしているが、但し王韜が扶乩のような迷信を本気で信じていたかといえそうではない。「笙村靈夢記」（巻五）は次のような話である。避暑のため申家に寄寓していた某秀才が、申家の娘を名乗る少女と懇ろになる。しかしその後、偶然「申韻秋女史の墓」と書かれた墳を目撃し慄然とする。申家の娘・韻秋は別の男性との結婚を両親に許されず、鬱屈して亡くなっていたのである。その晩秀才の夢に現われた韻秋は、今晚杜家の娘に転生し、16歳で彼の後妻となると告げる。ところがその16年後、再び秀才の夢に現れ、兵乱で殉難したため現在仙界にいる、今後きつとまた紅塵に降ると語る。半信半疑の秀才だったが、それから数年後、韻秋が今度は扶乩に降霊、「これから琴川の陸家に転生して、貴方との縁を結びたいと思います。虞山の下の方目の、入口に梨の花が15株ある家が私のいる家ですから覚えていて下さい。15年後に会いましょう」⁴⁸⁾との予言を下す。15年後、65歳になった秀才が予

言を頼って虞山の麓の陸家を訪れると、そこには確かに容貌がやや韻秋に似た15歳の子供がいた。しかし男子であり、秀才は言うべき言葉もなく失望して帰って行く。

「小説中に隠された風刺を察しなければ、王韜が神仙の道をひどく好んだと誤解されてしまう」⁽⁴³⁾との指摘の通り、ここではむしろ韻秋と秀才の執着を戯画化しているようである。王韜の滞欧記⁽⁴⁴⁾からは、王韜が近代科学に基づいて合理的に運営される欧州の都市の繁栄に深く心を留めていることが分かる。こうした知見により合理主義の齎す利益を当時の一般的読書人より遥かに深く認識していた王韜は、「世界に神仙などというものはない。(中略)狐は獣類にすぎず、変身など出来ようはずがない」⁽⁴⁵⁾という科学的認識を有していた。一方で「一切の幻とは、心によって生まれるものだと思う。日頃天国地獄の観念が心にあり、恐れや羨みの想念が去らないならば、病や憂悶の時に良心による自責の念が起こり、八大地獄が目の前に現れ、恰もその場にいるかのようになるのである。それは外でもなくただ心に発現するものに過ぎない。どうして天国地獄など実在しようか」⁽⁴⁶⁾という小説中の評語からは、王韜の世界観の特質を指摘する事もできる。つまり天国地獄などの実在は全く認めていないものの、しかし他方で人間の空想や想像の中にそれらが確かに存在するということは認めているのだ。亡き人への思慕や憐憫などを含め、「心によって生まれる」様々な幻想はまた、王韜の内心にも絶えず存在しており、仙女や扶乩は、現実主義だけでは割り切れないそうした幻想や情念を表現する手段だったのである。

3. 貞烈女子

以上のような「仙女」型のヒロイン以外に、『淞隱漫録』には「貞烈女子」型の女性も登場する。こうした女性形象は如何なるルーツを持つものだろうか。

「I. はじめに」で述べたように、明清時代には、女性の節烈を男性の政治的不節操に対比させて称揚する「節婦烈女」伝が登場する⁽⁴⁷⁾。その先鞭をつけたのは、明代、帰有光の「書張貞女死事」など張貞女をめぐる一連の作品とされるが⁽⁴⁸⁾、帰有光のこれらの作品には、更にもう一つそれ以前にはなかった特徴がある。即ち嫁ぎ先の悪辣な姑、無能な舅や夫に囲まれ、虐待を受ける日々を送り、挙句に淫行を強要されて殺された女子のことまでも文人たちが「貞女」として記録するようになったことである。つまり、それ以前の「節婦烈女」は、人々の「鑑戒」に資するため、なるべく模範的な女性を取り上げていたのに対し、明清時代には、「節烈行為の非常性、苛烈性、あるいは悲劇性が求められるようになり、尋常の貞節よりも奇節異烈、つまり「倣儻非常の行」が尊ばれるようになった」⁽⁴⁹⁾のである。更に戯曲小説などの「文学作品においては、通常の定型的な節婦烈女を扱うよりも、むしろそのような節婦烈女概念に含みきれない変則的なものを多くその題材として取り扱っている」⁽⁵⁰⁾というが、逆に言えば、女性の行為の非常性、苛烈性、悲劇性が戯曲小説に格好の題材を提供したとも言えよう。『淞隱漫録』に登場する貞烈女子たちもこうした流れに属するものだ。

まず「貞烈女子」(巻一)は次のような話である。ヒロイン王秀文は幼くして『長恨歌』を朗々と暗唱できる美貌の才女。書吏の父には書画骨董の収蔵家として有名な友人がおり、その関係からその友人の息子・項生との婚約がまとまり、秀文は金環を結納として受けた。項生の一家はその後両親が相次いで死亡、更には書画骨董も強盗に奪われすっかり零落する。すると秀文の父は項生の貧しさを嫌うようになり、娘に隠れて彼に婚約解消を告げる。憤慨した項生は位人臣を極めることを誓って旅立って行く。後日父から別の富豪に縁付かされた秀文は、輿入れの日に伴の金環を呑んで自害する。しかし出棺の日、突如現れた道士の助け

で生き返り、更には折よく武功を立てて帰郷した項生と再会し結婚するのである。

このように典型的な「才子佳人」型の話であるが、財産に心動かされる不徳義な父親に対し、娘の信念の崇高さを際立たせているところに特徴がある。俗悪な周囲の環境の中でただ一人それに染まらない少女の形象は、「周貞女」（巻二）でも同様だ。ヒロイン周喜子は寡婦の母と二人暮らし、書史に通じ針仕事にも優れる美貌の才媛である。幼い頃、農家の息子と婚約を結んでおり、釣り合わぬその婚約を周囲の人々は歎じていたが、本人は自若としていた。そんなある日、喜子が2人の女友達とともに廟に出かけたところ、廟内の美少年の神像に取りつかれ、女友達は帰宅後2人とも死んでしまう。しかし喜子だけは夢に現れた神像の求婚を、既に婚約の身であることを理由にきっぱり拒絶し死を免れる。次にはある富裕な商人が喜子の美貌を見初め、大金を餌に喜子の母を変心させる。婚約者の農民も恫喝され、いくらか金を渡されるとそれを望外の事として婚約を解消する。商人との結婚式の前晩に初めて一切を知った喜子は、毒薬を飲んで自ら命を絶つ。

この作品では、喜子の周囲は神像から母親、婚約者に至るまでいずれも見境がなく、愚かであり、喜子のみがあくまで清らかである。作者が末尾の評語で述べる「従一の義」という言葉は、封建的教化の言葉というよりは、むしろこうした喜子の精神的な高潔さの形容のようである。更にまた2作品に共通するトリッキーなエピソードからは、作者が明らかにエンターテインメントとして読者を楽しませることを目指していることが読み取れる。「玉児小伝」（巻十二）⁶³では更にエンターテインメント性を追求している。ヒロイン玉児は中国北方の曲芸師。当時極端に卑しまれていた芸人という職業にありながら、気性は烈しく、詩文に優れる才女でもある。彼女の公演を度々見に来ていた才子・徐高廉とは相愛の仲だ。しかし玉児の美

貌を気に入ったある御曹司が、計略をめぐらして玉児を我が物にせんと謀る。両親が脅迫されていることを知った玉児は、公演中に観客の面前でその御曹司をなじり、匕首で喉を突いて自刃する。

この一編の最大の見せ場は明らかに玉児の曲芸披露的一幕にあり、物語の舞台を北方と銘打つことによって、当時の上海の読者にエキゾチズムを感じさせるしかけにもなっているのだ。

以上のように『淞隱漫録』に登場する貞烈型の女性像とは、明清時代の「変則的」「節婦烈女」の物語の特質を受け継ぐものだ。更に言えば、作者の関心は貞烈女子の精神的崇高さを顕揚すること以上に、如何に読者の好奇心を引き付けるかという工夫の方により多く向けられている。こうした娯楽性の追求は、道徳的大義より実際の人間の人生の持つ不可思議さへの興味へと繋がるものでもあった。次節ではこうした例を取り上げてみたい。

4. 女性像の変容

前節までに見た「仙女」や「貞烈女子」という女性表象は、いずれも「人間としての品德や気概などの精神的な面では、むしろ女性のほうが男性よりも優れている」⁶⁴存在として女性を描くもので、明清時代の文人の女性崇拜の伝統を受け継ぐものである。王韜はこうした女性崇拜の伝統をベースに、欧州、特に英国において女性たちの社会活動を好意的に解釈した⁶⁵。つまり女子が男子と同じように教育を受けることも⁶⁶、電信局で大勢の若い女性が働くことも⁶⁷、纏足をしない女性が自分より早く走ることも⁶⁸、女性本来の品德や才能に照らせば、充分容認出来る事だったのである。そしてそれは王韜の描く女性像にも変化をもたらした。「仙女」や「貞烈女子」のような女性像は、反面ともすればそれに対立する悪女を生み出しかねないが、『淞隱漫録』にはそのどちらにも属さないヒロインも登場するのである。

「夜来香」(巻六)は夜来香という名の「淫婦」の話である。良家の生まれの彼女は、幼名を阿香といい、小役人との婚約が取り決められていたが、かつかつ家計を維持出来る程度のその家との結婚を嫌っていた。やがて近所の軽薄才子・徐某と私通し始め、その噂が近所に広がると居づらくなり、男と金陵へ駆け落ちする。しかしそこで徐某は金に目がくらんで阿香を遊郭へ売り飛ばす。裏切られたと知った彼女は慟哭して自殺しようとするが、同輩の妓女たちに制止される。美貌の彼女は、一旦妓女となるや忽ち人気を博し、妾として落籍させようと申し出る名士もいたが、妾になることを潔しとしない彼女は遂に従わなかった。その後、独力で大規模な妓楼を経営し、富裕になった阿香は、次第に文学や風雅を解して文士を款待するようになる。だが高位高官の者であっても気に入らなければ斥けたため、ある勢力家から恨みを買って誣告され、逮捕を逃れるための賄賂に家財一切を蕩尽、最後は流しの琵琶弾きにまで落ちぶれて亡くなってしまう。一方、阿香を売り飛ばした金を資金に金貸を始め、別の女を娶っていた徐某のもとに、ある晩阿香が現われる。そして「私たちはもと相愛で、密かに一生変わらず添いとげることが誓っていたのに、何で私を郭に売ったのです？ 今私は幸に苦界を離れ、冥界の主人に恨みを訴えると、貴方を閻魔府に召喚して問質すとのことですよ。俗世の楽しみがまだ味わえるなどと思わないで下さい」⁶⁷と徐某を罵るや鉄の鎖で絞殺する、というのが結末である。

阿香は王秀文や周喜子のように礼法の大義名分に従うのではなく、自らの欲望のままに生きる女性である。しかし作者は彼女の人物や人生に是非の裁断を下すことはなく、筆致は同情的で、むしろ彼女を裏切ったり、陥れたりする周囲の男性たちの方が悪辣な存在として描かれている。

また「龔繡鸞」(巻三)は次のような話である。繡鸞は名門・龔氏の娘で、幼少から聡明この上な

く、詩詞を好み、特に科挙用の文章・帖括に巧みだった。大儒だった父の急死後、老母とともに困窮した繡鸞は近隣の子供たちの教師となる。ふとしたことから教え子の兄である丁生との文通が始まり、繡鸞の文才を知った丁生は、彼女に文の添削を頼む。やがてこれが縁で二人は結婚、妻の指導のおかげで丁生はついに進士となった。ところで極めて聡明な繡鸞ではあったが、容貌だけは十人並みだった。それに飽き足らない思いを抱いていた丁生は、科挙に受かるや同年たちと郭遊びを始める。繡鸞はそれに感づく「夕方宴会に赴こうとすれば、必ず時間通りに帰るように言い、少しでも遅くなると顔色を変えて悪口を浴びせた。夫の行く先には密偵を派遣し、追跡させた。夫に三章の法を定め、違反すれば追い出し、家に入れなかった」⁶⁸というように、夫を束縛し出す。その結果丁生は数百金を携えて逐電、出奔先で日々遊廓に遊び、ひときわ美しい妓女を妾に買った。他方夫の失踪後、愛や煩悩から逃れるべく出家した繡鸞は、それでも夫の買妾の便りを聞くと「悲しみが募り、夜半崖から飛び降りよう」⁶⁹とするほど苦悩した。間もなく妾が死去したことで悟るところがあった丁生は、帰郷して繡鸞に大金を贈る。しかしながらそれがもとで彼女の暮らす尼寺に強盗が押し入り、繡鸞は殺される。事件を聞いた丁生は、過去の悪業を償うため紅塵を離れる決意をする。

女教師という繡鸞の設定は、王韜が滯欧記に塾教師の英国人女性を度々敬意を込めて書き留めている⁶⁹こととの関連が指摘出来る。一方、彼女はまた、棄妻の理由となる「七出」の一つで、儒教倫理では厳しい非難の対象となる「妬婦」としても描かれている。『崑山漫録』には妬みから妾を虐待する正妻がしばしば登場するが、こうした妬婦の描写には、王韜が楊氏の死後再娶した林氏との関係が反映していると考えられる。即ち林氏は晩年の王韜の廓通いを下男に尾行させるなどして

相当拘束したようなので⁶¹⁾、猛々しい妬婦の描写はその妻への一種の気散じなのである。古来妬婦を悪役として登場させる文学作品は数多く、王韜の作品にもその流れに沿ったものが多い中、「龔繡鸞」で注目すべき点は、繡鸞を男性を凌ぐ才能を有する女性として肯定的に描き、また夫の買妾を知った彼女の絶望にも触れていることである。

以上のように、阿香や繡鸞のような旧来の審美眼では称揚されない性質を持つヒロインにも、王韜はそれなりの理解を示している。それはまた、彼が後妻の林氏に対しても、根底では長年困難を共に乗り切ってきたことへの敬意を払うだけの公平性を持っていたこととも対応している⁶²⁾。

IV. 終わりに

以上本稿では、自由恋愛を描けば近代的、仙女や貞烈女性を描けば後れたものと一面的に評価する先行研究に対し、王韜の小説中の仙女像の来源や貞烈女子の人物形象を具体的に分析することで、明清文学の女性崇拜を受け継ぐその女性像の特質を示し、更に新たな女性像についても分析した。清らかで気高い仙女には先妻への思慕が投影されており、奇矯なほどに一途な貞烈女子の形象は、男性以上の忍耐力で逆境を生き抜く女性たちへの一種の敬意の現れと取れる。そしてこうした女性への関心という明清文学の伝統の基礎があればこそ、王韜は欧州で見聞した女性の社会活動を好意的にとらえることが出来、それが新たな女性像の開拓にもつながった。一言で言えばそれは女性の多様な生き方への肯定ということであり、そこに清末小説としての新しさも見出しうるのである。

[注]

- (1)王韜の略歴を自伝・評伝によって示すと以下の通り。王韜，字仲弢，一字子潜，号天南逸叟，また弢園老民。1828年11月10日（道光8年10月

4日），蘇州城外長洲の甫里村生まれ，初名は利賓。明代までは一族のうち朝廷に仕える者も多かったが，王韜の父の代には落魄，父は村塾の教師をし，後には上海に出て宣教師のための翻訳補助の仕事に就いた。王韜は1845年応試，第一等で県学に入り，一族から将来を嘱目されたが，翌年の郷試には受からず，科挙の道を断念した。1847年楊保艾と結婚（1850年死別，1851年林琳と再婚）。1848年父を訪ねて初訪問した上海で，墨海書館を設立し西洋書籍の出版，西学の宣伝を行っていたThe London Missionary Societyの宣教師・W.H.Medhurst（1796～1857）を知り，翌年父が亡くなると眷族を養うため1862年まで14年余り，墨海書館で彼の助手として働いた。この間王韜は，宣教師たちの『聖經』『格致西学提綱』等の漢訳に協力し，更に上海で最初の中国語刊行物『六合叢談』の編集にも参加した。しかし太平天国軍と清朝軍との内戦が激化する中，王韜は太平軍の地方長官に上書した嫌疑で指名手配を受け，1862年イギリス人の斡旋で香港へ亡命。香港ではThe London Missionary Society派遣のスコットランド人宣教師で英華書院院長でもあったJames Legge（1815～1897）の元に居住し，四書五経など中国經典の英文訳に協力した。1867年12月，Leggeの招きで欧州旅行に出発，1868年夏から1870年1月までLeggeの故郷であるスコットランドのドーラーに滞在した。香港へ戻ると1874年に中国語新聞『循環日報』を創刊し，変法自強の論陣を張った。1879年には日本を訪問して歓迎されている。1884年，李鴻章の黙認を得て上海へ帰り，『申報』や『万国広報』に執筆するとともに格致書院院長を務め，1897年その生涯をとじた。

- (2)雷頤・羅検秋訳，柯文（Paul A. Cohen）『在传统与現代性之間：王韜与晚清改革』（海外中国研究叢書）江蘇人民出版社，1994年。忻平『王韜評伝』華東師範大学出版社，1990年。張海林

- 『王韜評伝：附容閔評伝』（中国思想家評伝叢書 185）南京大学出版社，1993年。
- (3)小野川秀美『清末政治思想研究』（増補版）みすず書房，1969年，25頁。
- (4)游秀雲『王韜小説三書研究』（台北：秀威資訊科技，2006年）は現在までのところ王韜の文言小説を取り扱った専門書籍として最もまとまったものである。また王晋光『香港文学鼻祖王韜』（香港：田疇文献坊，2010年）は，香港の風物が王韜に与えた影響を論じる。
- (5)張海林，前出『王韜評伝：附容閔評伝』，321頁。
- (6)党月異「王韜的婦女觀及其文化心理」，『赤峰学院学报』2005年2月，18頁。
- (7)合山究「序」，『明清時代の女性と文学』汲古書院，2006年2月，i～iv頁。
- (8)合山究「貳臣の節烈觀と節婦烈女の伝記にあらわれた男性批判」，同上『明清時代の女性と文学』，第2編第5章，288頁。
- (9)合山究「『西青散記』の世界」，同上『明清時代の女性と文学』，第3編第3章，386頁。
- (10)今村与志雄訳，魯迅『中国小説史略下』筑摩書房，1997年，56頁。
- (11)この他魯迅は1934年に『淞隱漫録』を買い揃えた際に「『淞隱漫録』十二卷 原附上海《点石斎画報》印行，後有匯印本，即改称《後聊齋志異》。此尚是好事者從画報析出者，頗不易觀。戊年盛夏，陸續得二殘本，并合為一部存之。九月三日南窗記」（『集外集拾遺補編』，『魯迅全集』第8卷，人民文学出版社，2005年，411頁）と題識を記している。
- (12)忻平，前出『王韜評伝』，245頁。しかし本文で後述するように，16巻本が刊行された形跡はなく，広東刊というのについても不詳。
- (13)王韜「序」，『淞隱漫録』（清代点石斎原版重複石印）上海鑄記書局，中華民國13年。原文は以下の通り。「余向有遯窟譚言，則以窮而遯于天南而作也。今也倦遊知返，小住春申浦上，小築三椽，聊度凶籍，燕巢鷦寄，藉蔽雨風。窮而將死，豈復有心于遊戲之言哉。尊聞閣主人屢請示所作，將以付之剞劂氏。于是酒爛茗罷，爐畔燈昏，輒復伸紙命筆，追憶三十年来所見所聞可驚可愕之事，聊記十一，或触前塵或發旧恨，則墨瀋淋漓，時与淚痕狼藉相間。每脫藁，即令小婿繕写別紙。尊聞閣主見之，輒拍案叫絕，延善於丹青者，即書中意繪成図幅，出以問世，將陸續成書十有二卷，而名之曰淞隱漫録」。以下『淞隱漫録』からの引用は全てこの重複石印により，句読点引用者。なお以下引用原文の漢字は表記の都合上字体を改めてある。
- (14)游秀雲，前出『王韜小説三書研究』，130頁。陳大康『中国近代小説編年』華東師範大学出版社，2002年，45頁。
- (15)張海林，前出『王韜評伝：附容閔評伝』，310頁。中島長文『中国小説史略考證』（神戸市外国語大学研究叢書第34冊）神戸市外国語大学外国語研究所発行，2004年，85頁。
- (16)『申報』光緒13年6月25日，5145号（影印本，上海書店，1983年，[31] 275頁）。原文は以下の通り。「石印後聊齋誌異^{ママ}初集。長洲天南遯叟，文壇健將，墨海閑人，是書為渠極得意之作，用筆仿乎聊齋，命意等於說怪，以数十年之閱歷，数万之里遨遊，所見聞之俠女高人靈狐老怪，以至青樓之妙妓白屋書生，凡有可驚可鄂可敬可喜之事，無不曲意描摩，正所謂長篇不嫌長，短章不嫌短者，茲特不惜工本，鈔成工楷，復請吳友如先生，逐節繪図，同付石印，七月望日成書，吾知此書一出，實可与前聊齋誌後先媲美矣。每部用紅木夾版，洋二元在上海棋盤街宝文閣，並各書坊發售。味閒廬啓」。以下『申報』からの引用は全て句読点引用者，引用文内の暦は旧暦である。
- (17)『申報』光緒13年7月初4日，5153号（同上影印本，[31] 322頁）。原文は以下の通り。「前数日，見味閒廬告白，謂有石印後聊齋誌異^{ママ}図說初

集出售，乃長洲天南邇叟所作，閱之駭異，余並無是書，以意揣之，當是淞隱漫錄無疑，是書亦說部之流，每期選登一則，倩名手繪圖，附於畫報之末，自甲申年第六號畫報為始，每一篇出，頗蒙海內名流所欣賞，至今殆盈一百二十則。是書凡十有六卷，猶未藏事，擬俟書竣之日，彙齋裝訂，以成全璧，不意竟有據足先登者，真為咄咄怪事。按是書，乃由点石齋主人出重價購來，以後或照印，或排纂，或付剞劂氏，惟点石齋主人可為，天南邇叟亦不得擅自刊售，何則以已受書值故也。乃今者，既不商之点石齋主人，又不下詢之余絕不一言，毅然竟為，抑何巧取豪奪。一至於此，余自壬午年言旋滬上，惟知杜門著書，不涉戶外事，惟此刊書一節，有不得不亟為辯白者，一則与点石齋主人早有約言不容擅印，一則点石齋主人屢來詰問不免生疑，雖具百嘆莫能自解，平昔所經自信者安在，敬問味閒廬主人，其將置余於何地，祈必有以覆我。光緒丁亥秋七月三日天南邇叟謹白」。なお、王韜が上海に定住するようになったのは既に述べたように1884年で、ここで光緒壬午年（1882年）に上海へ帰ったと言うのは、この年に一時帰郷したことを指すようである。

(18)但し味閒廬の『石印後聊齋誌異圖說初集』の広告には、この後しばらく現れず、1887年10月13日付になって、前回の広告文のうちの「七月望日成書」の部分が「已成書」（『申報』光緒13年8月27日，5205号（同上影印本，[31] 662頁））に変えられたものが現れるので、刊行はこの頃であったかもしれない。

(19)『申報』光緒13年7月初6日，5155号（同上影印本，[31] 333頁）。原文は以下の通り。「啓者，本齋所印淞隱漫錄，乃天南邇叟所撰，即味閒廬所云後聊齋誌異^{ママ}圖說初集也，此書本属十有六卷，今先以十二卷刊出問世，尚有四卷歸錄統錄，邇叟行篋中所有新奇怪異之事甚夥，已成淞隱統錄十二卷，容俟嗣出。至於淞隱漫錄一書，其筆墨

之瑰璋，詞句之華麗，可不必言，与蒲留仙聊齋誌異，後先媲美可無愧色，近代說部無出其右，每篇之前，繪有一圖，皆倩名手為之，出自吳君友如之手者亦復不少，所書繩頭小楷，工整端媚，雅近簪花妙格，如於無事之時，窗明几淨，焚香展閱，亦可以消遣世慮，洗滌煩襟，較世間惡札自有霄壤之別，想覽者不以余言為河漢也，請訂四冊定價每部洋一元二角，準於七月二十日出書，凡欲售者，請至南北申昌可也，如有躉買，當從廉特，此奉聞」。

(20)『申報』光緒13年9月13日，5221号（同上影印本，[31] 773頁）。原文は以下の通り。「新印縮本淞隱漫錄圖說十二卷發售告白。淞隱漫錄一書，係本齋出重金，敦請天南邇叟，據所見聞演說，繪圖附釘畫報後幅，按期以分送者，迄今已既輯有十二卷，裒然成帙，因出售稿復加修整縮成小冊，益覺錦簇花團，世之好為影射者，恐為能仿佛其萬一也，分裝四本，外加綾函，價洋一元，躉售面議，准与十五日發售。南北申昌及各書坊，皆可購取，此佈」。

(21)初名『淞隱統錄』を單行本刊行に際して改名した。

(22)王韜「自序」，『淞濱瑣話』（天南邇叟手校，甫里王氏藏本）光緒癸巳淞隱廬排印本。原文は「淞隱漫錄重刻行世，至再至三，或題曰後聊齋圖說，售者頗眾」，句讀点引用者。

(23)王韜「弢園著述總目」，汪北平・劉林整理，王韜『弢園文錄外編』中華書局出版，1959年，附錄385頁。原文は「坊友旋即翻板，易名曰後聊齋志異圖說，圖面較原刻為工」。「弢園著述總目」はもと1889年上海美華書館出版の『弢園經學輯存六種』に附せられたものである。

(24)王思宇「校点後記」，王思宇校点，王韜『淞隱漫錄』人民文学出版社，1983年，599頁。

(25)游秀雲，前出『王韜小説三書研究』，132頁。但し游は繁体字を「藥娘」に作るが、『淞濱瑣話』の原文では「藥嬢」である。なおまた王思宇校

- 点本は、卷九の「黔楊苗妓紀聞」「黔苗風俗紀上」「黔苗風俗紀下」の3篇を苗族への差別的描写があるという理由から削除している。
- (26)王韜「先室楊碩人小伝」、前出『弢園文録外編』、332頁。原文は以下の通り。「碩人楊氏、名保艾、字臺芳、後余為更其字曰夢蘅、苴汀先生諱雋第三女、醒逋茂才名引伝之胞妹也。早失怙恃、育於叔氏。少即敏慧、代嬸持家事、操井臼、飭簠簋、靡不具有條理。雖不知書、而於兒童塾中課本琅琅成誦。嫺靜寡語、能識大体、諸姑伯姊間和氣相尚、務得其歡」なお『弢園文録外編』は王韜が1874年香港で創刊した『循環日報』の「精華を集めて成った」(戈公振『中国報学史』商務印書館、1928年、154頁)ものである。
- (27)王韜「潘孺人伝略」、同上『弢園文録外編』、336頁。原文は以下の通り。「余亦二十三歳早賦悼亡、楊碩人夢蘅年蓋一僅二十有四、与秋初有同悲焉。今為潘孺人作伝、追念前事、重触老懷、哽咽催藏、不能自己。急道写録、以付秋初、毋再使余淚涔涔墮也」。
- (28)同上「潘孺人伝略」、334頁。原文は以下の通り。「孺人姓潘氏、名珠、一名媚蘭、字素五、甫里人、為煥卿先生第五女、恕齋解元從妹。少出詩礼之家、一門群從、俱嫺翰墨。孺人尤靜好幽閒、慧中秀外、靈警異常。六七歳即不肯与諸女伴嬉戲、弄筆硯、親文字、見碑帖輒欲摹仿、必求其肖而後已、嘗執卷問字於兄、一二遍後即已琅琅上口」。
- (29)王韜「悼紅仙史」、前出『淞隱漫録』卷七、7頁。原文は以下の通り。「潘素五、字媚蘭、小字珠兒、生自名門。父煥卿、讀書好善、鄉里間稱為長者。(中略)女少即警慧、每從諸姊後吟詩識字、或調脂弄粉、間作竹石小画、娟楚有致。年甫八九歳、已如成人。諸女伴有來約嬉戲者、輒婉辭之」。
- (30)同上「悼紅仙史」、7~8頁。原文は「君夫人本天上仙媛、偶謫紅塵、乃是短縁適合。君之姻縁、已有他人、戚戚何為哉。明日当必有所見」。
- (31)王韜「月仙小伝」、同上『淞隱漫録』卷十二、2

- 頁。原文は「誰是汝妻、此瑤宮第七女、近新卜居於是、豈汝凡夫俗骨所得妄覩哉。不速走、將嗾烏龍咋汝脛」、「此非汝妻矣。汝妻塵縁已盡、縁盡如香銷燼滅、即再爇、亦不復燃、何必恋恋為」。
- (32)所謂テーブル・ターニングの一種で、扶鸞・扶箕・飛鸞などとも呼ばれる。明清期の文人と扶乩との関わりの詳細については、合山究「明清の文人とオカルト趣味」(前出『明清時代の女性と文学』、第3篇第2章)参照。
- (33)合山究「明清の文人とオカルト趣味」、前出『明清時代の女性と文学』、第3篇第2章、328頁。
- (34)同上、339~350頁。
- (35)同上、351~361頁。
- (36)王韜「李韻蘭」、前出『淞隱漫録』卷六、12頁。原文は「余李氏韻蘭也、現為蕊珠宮校書仙子。向在人間為陸郎妻。今知陸郎在此、故來相會」、「余告陸郎、世間一切皆幻、不独富貴功名、有如鏡花水月、即夫婦兒女、亦同泡影露電、不久即滅」。
- (37)例えば光緒十季十二月上澣『点石齋画報』第27号(丙3)の記事「飛鸞新語」は、江夏のある書生が友人たちと扶乩すると、亡妻が生前作った詩が書かれたというエピソードを描いている。
- (38)王韜は、「当時の文人と、扶乩で降下した仙女との間の交感、交霊をもとにして生まれた一種の心靈主義スピリチュアリズムの文学」(合山究「『西青散記』の世界」、前出『明清時代の女性と文学』、第3篇第3章、366頁)たる『西青散記』の刊行者でもある。
- (39)原文は「宏光」。
- (40)王韜「乩仙逸事」、前出『淞隱漫録』卷四、19~20頁。原文は「以節烈之名媛而屈死於非命、史冊不載」、「若得發為歌詠、譜入管弦、或賜以表章、載諸志乘、則雖死之日、猶生之年、翠雲感且不朽」。

- (41)同上, 20頁。原文は「柳程皆以一弱女子而能禦強暴而不撓, 臨死亡而不懼, 鬚眉且愧之矣」。
- (42)王韜「笙村靈夢記」, 同上『淞隱漫錄』卷五, 2頁。原文は「以与玉郎情緣未斷, 茲將託生於琴川陸家, 以續君姻, 記取虞山下第五家門前有梨花十五株者, 即妾所居也。十五年后, 重与郎君相見」。
- (43)游秀雲, 前出『王韜小説三書研究』, 180頁。
- (44)王韜は1867年末から1870年初まで渡欧した(注(1)参照)。この体験を含む旅行記が『点石斎画報』に『漫游随録図記』の名で連載され, 後単行本としても点石斎書局から刊行された。先行研究で最もよく引用される, 陳尚凡・任光亮校『漫游随録・扶桑游記』(走向世界叢書, 湖南人民出版社, 1982年)は, 上海図書館所蔵の鈔稿本に基づいており, 点石斎刊の『漫游随録図記』とは各編の配列が異なっている。本稿の同書からの引用は, 単行本『漫游随録図記』を底本に排印した, 王稼句点校『漫游随録図記』(山東画報出版社, 2004年6月)を使用した。
- (45)王韜「序」, 前出『淞隱漫錄』。原文は「夫天下豈有神仙哉。(中略)狐乃獸類, 豈能幻作人形」。
- (46)王韜「夢遊地獄」, 同上『淞隱漫錄』卷九, 8頁。原文は「吾以為一切幻境, 都由心造。平日具有天堂地獄之說在其心中, 恐懼欣羨之念往來不定, 逮乎疾病暫亂, 由其良心自責, 於是乎刀山, 劍嶺, 燄坑, 血湖現於目前, 恍同身受。無他, 仍其一心之所發現也, 豈真有天堂地獄也哉」。
- (47)合山究によれば, 明清時代の節婦烈女伝には「然則世之号為丈夫, 有愧於烈婦女者多矣」といった女性賛美, 男性蔑視の表現が度々現れるというが(合山「節婦烈女——明清時代の女性の生き方」, 前出『明清時代の女性と文学』, 第2篇第1章, 171頁), 『淞隱漫錄』にも「Ⅲ-2 扶乩と女性」で取り上げた「乩仙逸事」(卷四)における「以一弱女子而能禦強暴而不撓, 臨死亡而不懼, 鬚眉且愧之矣」や「雖巾幗而勝於鬚眉百倍矣」(「胡姬嬌雲小伝」(卷六))など同種の表現が見られる。王韜もこうした觀念を受け継いでいたと判断できるだろう。
- (48)野村鮎子「歸有光と貞女」, 『歸有光文学の位相』汲古書院, 2009年, 第Ⅱ部第4章, 407頁。
- (49)合山究「節婦烈女の異相」, 前出『明清時代の女性と文学』, 第2篇第3章, 241頁。
- (50)合山究「節婦烈女の多様化と節烈觀の変容」, 同上『明清時代の女性と文学』, 第2篇第4章, 251頁。
- (51)張振国はこの「玉児小伝」について, 王嘉楨『在野邇言』中の一編「玉児」からの剽窃であるとする(張振国「王韜小説中部分作品著作权質疑」, 『南京師範大学文学院学報』第4期, 2009年12月, 74頁)。按ずるに「玉児小伝」と「玉児」は部分的に全く同文で, また王嘉楨の息子紹翌が, 「玉児」の末尾の割注に「此則於光緒丁亥七月中旬被淞濱漫録竊刻男紹翌謹誌」(王嘉楨『在野邇言』卷之六, 4頁(光緒甲午重刊影印本, 新興書局, 筆記小説大觀第3編, 4928頁))と記しているところから見ると, 王韜は確かに「玉児」を基に「玉児小伝」を作ったようである。しかし約1000字の「玉児」を王韜は約2倍に敷衍させ, 玉児のキャラクターも「玉児」が「無姆教未嘗読烈女伝」というのに対し, 「玉児小伝」では「性好書史頗識字」と設定されているなど違いが見られる。こうした創作例は他にもあり, 「甘姫小伝」(卷十二)も同じく『在野邇言』卷之六の約220字の「甘姫」を約10倍に肉付けしたもの, 「鵲紅女史」(卷十)は郭麐『靈芬館詩話』続卷四などに引く, 清代後期, 読書人の間で愛好された鵲紅という女子の自序文と詩をそのまま引用して敷衍させたものである。現代の価値観での可否はさておき王韜の創作方法の一つと見なせるものであると判断し, 本稿では「玉児小伝」も王韜の作として扱う。
- (52)合山究「序」, 前出『明清時代の女性と文学』,

iii頁。

(53)当時の英国での女性差別の実情については、王韜が英国に滞在していた1869年に発表されたJ.S.ミルの『女性の隷従』に詳しい。しかし少なくとも「リベラル・フェミニズムの古典的著作」(リサ・タトル、渡辺和子訳『フェミニズム事典』明石書店、1998年6月新版、375頁)たる同書が出版されたこと自体が時代の変化を示すものであり、王韜が交際した中産階級の女性たちが中国に比べれば遥かに活動的だったことも事実だろう。

(54)王稼句点校、王韜、前出『漫游随録図記』、93頁。

(55)同上、96頁。

(56)同上、141頁。

(57)王韜「夜来香」、前出『淞隱漫録』巻六、2頁。

原文は「妾与君本以情合、竊謂畢生不易、万世相隨、君抑何忍心、売妾為娼。今幸得離苦海、訴之幽冥主者、以伸妾怨、茲特邀君往閻摩府一為質證耳。汝尚想享人世間樂事耶」。

(58)王韜「龔鏞鸞」、同上『淞隱漫録』巻三、3頁。

原文は「夕赴賓筵、必計刻而歸、稍遲則反唇相稽、声色俱厲。生之所至、偵騎四出、相屬於道。与生約法三章、違則閉之房外、或携被他處、不与同宿」。

(59)同上、4頁。原文は「悲惋益甚、夜半自經懸絶下墜」。

(60)「壁滿有妹曰媚梨、在法京為女塾師、教女弟子以英国語言文字。一夕、以盛設茶会特延余往。塾中女弟子、長者凡二十余人、年皆十六七、無不明慧修整、秋菊春蘭、各极其妙」(前出『漫游随録図記』、75頁)、「其地有波斯貳母女、以才学著聞、設女書塾、及門頗盛」(同書113頁)、「愛倫女士母出自貴家、淹通經籍、因設塾授女弟子塾書、絳帷佳麗三十余人、悉出謁見、争以認一面為榮。女士母与諸女弟子弁論往復、妙思泉涌、綺語霞蒸、曹大家、謝道韞之流也」(同書143頁)。「ヴィクトリア朝期とエドワード朝

期を通して、中産階級の少女が通った学校の大多数は、おそらく生徒数20人までの小規模な、地元の通学制学校であった。そのほとんどは、家族の生活をモデルとし、個人の私宅で経営されていた」(香川せつ子訳、ジューン・パーヴィス『ヴィクトリア時代の女性と教育——社会階級とジェンダー』ミネルヴァ書房、1999年、89頁)というから、王韜が見聞したのもそうした類の学校の女教師だったようである。

(61)忻平、前出『王韜評伝』、205～206頁。柯文、前出『在伝統与現代性之間：王韜与晚清改革』、163頁。また『淞隱漫録』巻十「三十六鴛鴦譜下」には、恐妻家として有名だったらしい王韜の次のようなエピソードが描かれている。「金玉為蘭隱女史之妹、即所謂陳小宝者也。(中略)伊園主人戲語姬曰、王郎(引用者注：王韜を指す)詩名不如懼内之名更著。姬笑目生曰、君蓋改從我姓。生詢其由、姬曰吾家陳季常、非君之前輩乎。合座粲然」。

(62)林氏について王韜は、「統娶林氏名琳、字懷衡、一字泠泠、經歷患難中与老民同甘苦」(「弢園老民自伝」、前出『弢園文録外編』、330～331頁)と言い表しており、また友人への手紙でも再婚後の夫婦関係を「我妻死我不能為之不娶、琴瑟和合如故也」(汪北平・劉林編校、王韜『弢園尺牘』中華書局、1959年12月、9～10頁)と表現している。